

哀しきエピゴーネン〔Ⅱ〕

Ⅱ エピゴーネン語史

菊池良生

エピゴーネンという言葉はひとつの評語である。ないしは蔑称語である。この「ないしは」にはそう簡単に無視できぬ意味がこもっている。先ずその辺の所から書くことにする。さて、エピゴーネン、用例を手許にある角川類語新辞典で見てみる。この類語辞典、語を五十音別に配列するのではなく、体系的に意味分類して配列しているところが味噌らしい。それによれば、エピゴーネンという語は、大分類「学芸」、中分類「文学」、小分類「文芸用語」の項に配列されており、その項中「C. 人格に関するもの」という欄の10番目に掲げられている。記事は以下の通りである。（尚、本来の記事は言うまでもなく、縦書きになっている。ここでは便宜上、横書にして紹介する。）

〔エピゴーネン〕○正当な子孫が原義。転じて追随者・模倣者。文学上は優れた先行者のまねばかりをしている独創性のない亜流。
文章《Epigonen 独》……以下省略。

しかし、それにしても、いたく興そそる配列、記事である。三題噺ではないが、配列及び記事のなかから3つの題をとりだし、一席ぶつことができそうである。3つの題とは「文芸用語」、「C. 人格に関するもの」、《Epigonen 独》である。

先ず、「文芸用語」。これを「文芸学用語」と読むことにする。文芸学用語というからにはエピゴーネンという語は評語である。そして、その評とは、文学作品を対象として客観的方法によって体系的に研究する行為だと一応は解することができる。

次に「C. 人格に関するもの」。一読、奇異な感じがつきまとう。少なくとも私にはそんな気がした。それは、この題目が、先の題目、すなわち、客観的方法によった体系的研究行為とはほぼ相対立するものと見たからである。これはなんとも粗忽な見方である。だが、一先ず、そのままにしておくと、やがて、こういう問を發することができる。すなわち、「文学を論じるのになにゆえ、人格を問題にせねばならぬのか？」と。勿論、この場合、人格とは作者のそのことである。さて、すると、エピゴーネンという語は元来、否定的語感を持つので、語はここで評語のレベルから蔑称語のレベルに堕ちて行く。「文芸学用語」に蔑称語が混り込んでいる。奇異な感じをもった所以である。（実際は辞典中にある「C. 人格に関するもの」とは、様々な事例より客観的方法によって抽象された性格類型に対する呼称群のことである。例えば、ドンブアン型、ドンキホーテ型、ハムレット型等々である。私の抱いた奇意な感じはとんだ見当外れということになる。それに「文学を論ずるのに、なにゆえ人格を云々」の間は、よく考えてみれば、文学を客観的方法に従ってみつめるという立場を殊更、採らなくても發することができる類のものだ。第一、客観的方法とはなにか？こと文学に関していえば、大いに疑義あるところである。しかし、ここは敢て三題漸を続けることにする。）

さて、「文芸用語」、「C. 人格に関するもの」と続いて、最後に《Epigonen 独》とくる。エピゴーネンという語は独逸語である。そこで落ちが着く。つまりエピゴーネンが独逸語＝ドイツ語であるならば、それが「文芸用語」であり、「人格に関する」用語であるのは奇とするに足らず、そのまま納得できるというわけである。なぜなら、ドイツでは、少くとも一時期、文学を論じることとは、即、作者の人格を論じることであったからである。「作者の個人としての性格が読者にとって重きをなすのであって、作者の技術の才能ではない」（ゲー

テ)というわけである。さて、落ちが着いたところで、変挺三題嚆は終えて、以下、ドイツ語エピゴーネンについて書く。

ドイツでは文学を論じること、作者の人格を論じることでもあったとは多くの專家が指摘しているところである。例えば、ゴットフリート・ベンの「文学は生を改善すべきか？」(1955年)と題する講演。ベンは先ず、この演題のような人文主義的、理想主義的な問いが取沙汰されるのはドイツ特有の現象であるとしている。これは、ドイツでは詩宗ゲーテを始めとする詩人たちが、詩人の人格そのものが「ひとつの範例、偶像、完結した道徳的自我、先達として、若者たちや時代そのものを導き、改善することができる」(飛鷹節訳)と考えられてしまうからである。確かにこんなことは、賭博師ドストエフスキー、酔漢ヴェルレーヌ、途徹もない錯乱者ランボー、男色家を気取るワイルド等々が跳梁跋扈する他の泰西顔唐諸国では考えられないことであり、まさしくドイツならではのことであろう。ベンは過去1世紀にわたってドイツが輩出してきた偉大な市民的文学者たちを眺むれば、こうした傾向もむべなるかであると納得している。しかし、今日では、そうはいかない。「今日の多くの詩人にとっては、そういう思想(=人文主義的、理想主義的思想)が慰めを与えてくれるようなかたちで育つことはまずなく、今日の詩人は無慈悲なまでの空虚さのなかで生きている」(飛鷹節訳)からである。

さて、M. ヴィントフルによれば、エピゴーネンという語が、原義から転じ、文芸用語として装を新たに初めて辞書に登場したのは1860年のことになる。辞書とは勿論ドイツのそれ(Daniel Sanders, Wörterbuch der Deutschen Sprache)であった。因みにイギリスでは1865年、The Oxford English Dictionary に、フランスでは1876年、Émile Littré, Dictionnaire de Langue Française に、それぞれ、epigones, épigones となってこの語は記載されている。ドイツに遅れること、それぞれ、5年、16年のことである。この年差には参商ほどのへだたりあること言うまでもないだろう。尚、ついでに言うと、フランスの Littré の辞書中の記載は、ある引用文中においてとのことである。そして、C. ダーヴィットによるとこの語は、フランス・アカデミー発行の辞

書には今日に至るまでいまだ未収録の由である。このことは、エピゴーネンという語の概念が頗るつきにドイツ的刻印を帯びたそれであることを示している。と同時に、エピゴーネン概念についてのフランス特有の意識が介在しているとみることにもできる。これについては後に触れることにする。

ところで辞書というものは概して極めて保守的な書物であり、新語の収録は、その語の対象とする現象への認識が世の中にどれほど普及したかをみきわめたうえで初めて行うものである。そして、そうみきわめるのに臆病なほど時間をかけるものである。少くとも20～30年位の時をかけるのではなかろうか。とするとエピゴーネンという語は19世紀前半ごろからドイツにおいて取沙汰され、中葉において、目でたく辞書入り。ということになる。これはペンの言う過去1世紀のことになる。

目でたく辞書入りして以来、否、人の口にのぼり始めて以来このかた、エピゴーネンという語は蔑称語として享受、運用されてきたと言える。それでは、蔑視されるエピゴーネンとは対蹇的に位置にある人々とはどんな人々なのか。ペンが成程と脱帽した過去1世紀の偉大な市民的文学者たちのことではなかろうか。偉大な市民的文学者たちとは、単にお行儀のよい、人品骨柄卑しからぬ人々を言うのではない。ついでに大胆に言えば安定した市民生活を営みながら、狭いがゆえにそれだけに純粋な抒情の世界をきり拓いた詩人たちのことだけをさすのではない。ペンの言うところと少し違って来るかも知れぬが、こう言ってもいいだろう。つまり偉大な市民的文学者たちとは、あらゆる周囲世界に対し、己の個を研ぎ彩ることによって、周囲世界、時代、社会、個を、すなわち生を改善できると信じ得た詩人たち、かつ、そう信じることによって、作品のなかに己の個を刻印できた詩人たちのことをもいうのであると。ところが、ペンは今日ではそうはいかないと言う。これは今日を生きる詩人たちの1人の例外も評さぬ酷薄な運命である。この酷薄な運命に洩れなく襲われることによって、人々は初めて、過去1世紀において、そうはいかなかった人々の、否、その文学を見返すようになる。これは過去1世紀における偉大な文学者たちの否定では断じてない。偉大な文学者を聖視し、ひたすら尊しと仰ぐことを

のみ教える、ある文学論への疑念である。エピゴーネンという語は、まさしくこの文学論の枠組のなかで蔑称語として享受・運用されてきた。かかる文学論への疑念は次のような発言をひきだすことになる。すなわち、Fr. ゼングレは1956年、ある講演で「私たちはこのエピゴーネンという概念の使用にはだんだんと慎重になってきました」と語るのである。慎重になってきたのは「私たちが、古い文化を考察していくうちに、偉大な作品の産出のためには意識的オリジナリテートは必要としないことを知ったからであります」（傍点筆者）。とすると先程から言う文学論とは、いわゆるオリジナル絶対論ということになる。（それでは「文学は生を改善できるか？」という問を発する人文主義的、理想主義的思想が、いわゆるオリジナル絶対論と直接結びついているということになるのか？これはいささか難問である。しかし、両者は深部では通底していることは間違いないだろう。）

ところでオリジナル絶対論への疑念とは、意識的オリジナリテートの否定ではあっても、オリジナリテートそのものの否定では断じてない。オリジルとはなになのかと問い返すことである。この問い返す作業を、エピゴーネンという語を手がかりに進めて行くのが、この小文の狙いである。

先ず、エピゴーネンという語の語史から始めるのが順当であろう。それにはM. ヴィントフルの「エピゴーネン、その概念、現象と意識。I. 語史」という恰好の導きの糸がある。この論を祖述するというかたちで以下、語史を早わかり風を書くことにする。（以下、拙論、「哀しきエピゴーネンI」と重複するところが多い。）

エピゴーネンという語は、元来ギリシア語で単に後裔を意味するに過ぎない。ギリシア語エピゴーネン（'Επίγονοι エピゴノイ。'Επίγονος の複数。）の運用のうち、最も知られているのは「テーバイ攻めの七将」の息子たちのそれである。そのかみオイディプスの息ポリュネイケースは諸将を集め、破約を犯した兄、エテオクレースを攻めるべくテーバイに向かって発進した。これがアドラストスを総帥とした七将のテーバイ攻めである。（但し、諸説あり）。だが、この遠征は敗戦に終わり、七将はアドラストスを除き、ことごとく敗死し

た。この第一のテーバイ攻めの敗北10年後に七将の息子たち（その七名の名についても諸説あり。）、すなわちエピゴーネンは新たな進発を企て、見事、これに成功し、テーバイの町を破壊した。このエピゴーネンによる第二のテーバイ攻めは、第一のその単なる繰返しでは断じてない。もって顕彰すべき大事であった。なぜならエピゴーネンは、父たちの汚名をそそぎ、エテオクレースによって始められた不義を糾すという彼らに課せられた義務を完璧に果したからである。それゆえ、ホメロスは「イーリアス」第四書のなかで、エピゴーネンの1人ステネロスをして、「憚りながら我々は親たちよりも、ずっとしっかりしているつもりだ、／七つの門のテーバイの城を攻め取ったのも我々ですから。／ずっと少ない人数を率いて、いっそう堅固な砦を襲った。／それも諸神が示された象^{きざし}と、ゼウスの神助を恃んでのこと。／それに引き換え、あの人たちは、おのれの増上慢から、身を滅ぼした、／それゆえどうか私らを父親などと同列に見ては下さいますな。」（呉茂一訳）と言わしめたのである。因みに、アレクサンドリア大王は、イラン併合の折、スサにおいて、3万の若いイラン人兵士に向かって「エピゴーネンよ」と呼びかけたとのことであるが、これは、勿論、先の故事を踏まえた、大王の異邦人懐柔政策の1環であった。

このようにエピゴーネンという語は、古代ギリシア、アレクサンドリア期においては単に系統的意味合いしか持ちあわせておらず、決して蔑みを含んだ言葉ではなかった。それどころか時と場合によっては頌詞にさえ使われもしたのである。さて文学史の場で言えば、この語は後世において、さして文学上の関心を引かずにいたとのことである。エピゴーネンの語用のうちもっとも知られているのは「テーバイ攻めの七将」のそれであると先に書いたが、後世の詩人たちの関心を引いたのは、エピゴーネンではなくて、七将、すなわちエピゴーネンの父親たちであった。例えばゲーテは、父親たちのテーバイ攻めの神話を「アルゴナウテースたちの遠征」神話と並ぶべきものと指摘している。しかし、そうは言っても、この「テーバイ攻め七将」神話は他のギリシア神話に比べれば、後世の人々の関心を引く度合少かったようである。事実、ゲーテは先の指摘に対し、「この出来事はこれに先行する出来事同様に我々のはるか遠く

にある」という但し書きを添えている。父親たちへの関心の低さに倍してエピゴーネンへのそれは低かったこと言わずもがなである。

しかし、それではエピゴーネン神話という題材にいかなる詩人も目もくれなかったかという、そうではないらしい。1757年、スコットランドの詩人、ウィリアム・ウィルキーが叙事詩「The Epigoniad A Poem In nine books」を出版しているとのことである。このウィルキーという人はこの叙事詩により「スコットランドのホメロス」と一時顕彰されたらしいが、いまや、少なくとも私にとっては全く忘れられた詩人である。従って、私はこの叙事詩を目にしたこともない。そこでヴィントフールの言をいままで通り引き続き写してみる。さてウィルキーは叙事詩人をもって任じていたとのことである。そして彼によれば、叙事詩人は何よりも読者に感興を引き起こせねばならない。とすれば、叙事詩人は読者が、日常茶飯的に想起できる事象を詩ってはならない。また、古い物語を題材にするにしても、現代化してはならない。現代化することによって現代の照り翳りが件の古い物話に添えられ、読者の純粋な感興が削がれるとでもいうのだろう。この伝でいけば、例えばゲーテの「イフィゲーニヤ」は、後にゲーテ自ら恐ろしく人間的であると述懐しているのだから、これを叙事詩としてみることは勿論できなくなる。ともあれ、ウィルキーによれば、叙事詩人とは、読者の日常的想像を越えた、読者から最も遠く離れた時間の、かすみのかたにある事象を題材とせねばならぬことになる。なぜなら、そうした題材にこそ叙事詩人は自由闊達に己の理想の炎を吹き込むことが可能となるからである。こうしてエピゴーネン神話が題材に採られたというわけである。エピゴーネン神話ならば、先に引いたゲーテの但し書きではないが、まさしく「この出来事は我々のはるか遠くにある」と言うことができ、まさしくウィルキー理論にピタリと合致する題材と言えることができよう。（それほどエピゴーネン神話は人々の関心を惹かなかったということである。）しかし、そうはいいながらもウィルキーは、このエピゴーネン神話を戯曲にする際、かなり手を加え、伝説に反してまでも、オデッセイウス、アガ멤noonらを主な登場人物に仕立て、その細部にわたってイーリアスに範を仰ぎ書き上げているとい

う。それは、ひとえにこの神話に光彩を与えるためだという。奇とするところである。実際に目にしていないのに、こう言うのも大変、憚りある所だが、この戯曲、ご当地スコットランドでも今では全く忘れられているというのもなんだかわかるような気がする。

さて、一つ二つの例外はさておくとして、エピゴーネン神話はほとんど人々の関心を惹かず、従ってエピゴーネンという言葉も、ただ単に後裔という意味を持つに過ぎずにいたというのが真相である。ところが、エピゴーネンという語は、その意味を突然、思いがけない方向に転じ、転じたがゆえに人々の口に度々のぼるようになったとは文学史の公説である。それは言うまでもなく、カール・レープレヒト・インマーマンの手になる長篇小説「エピゴーネン」(1836年)をきっかけにしてである。この小説は「エピゴーネン」と題してはいるが、先程からいっているエピゴーネン神話の直接の翻案ではない。ではなぜこうした題をつけたのか。それは直接、作品に語ってもらうしかないが、取敢ず、この小説の創作ノートらしき作者の私信を紹介しておく。この私信は1830年4月に作者が兄フェルディナンドに宛てたものである。「この小説はエピゴーネンという題をつけることにしました。そしてこの小説は遅れて生れてきたものたちの祝福と災厄を描いております。私達の先祖の労苦と汗したたる双肩のうえにたっている私達の時代は、ある精神的な過剰を病んでいます。先祖たちの遺産の相続権を私達はたやすく手に入れることができるのです。その意味で私達はエピゴーネンなのです。このことからまったく固有の衰弱が生れてきました。この衰弱をあらゆる状況にわたって表現することが私の任務なのです。この仕事で最もむずかしいのは、こうしたのろわれた素材から晴朗な芸術作品を造り出すことであります。なぜなら野戦病院物語に逃げれば、極めて容易に理解が得られるからです。」

先に引いた「イーリアス」第四書のエピゴーネンの一人ステネロスの科白とは何と懸隔ある述懐であろうか。遅れてきたこと、そのことが既に原罪であると言わんばかりである。それでは何に遅れたのか。ゲーテ時代にである。ゲーテ時代を黄金時代に見たて、言うなれば水銀時代にある自分達の境遇を描くと

いうわけである。黄金伝説ならぬ水銀伝説というところか。

この水銀伝説の主人公はヘルマンという一人の青年である。他の主な登場人物に挙げられるのは先ずは封建社会を代表する侯爵、これに対抗する産業社会を代表する大工場主であるヘルマンの叔父の2人である。こうした二つの世界の対立を経糸に主人公ヘルマンと、侯爵夫人、夫人の義妹、実は姦通によって生れたヘルマン異腹の妹ヨアンナ、叔父の養娘コルネリー、ヘルマンに付き従う、妖精のような、また癩癰症のような小女「小さな炎」らとの異彩極まる交流、そして侯爵家の執事ともいえる哲学者然とした美学者ウイルヘルミ、神を恐れぬ体の酷薄な唯物主義者である侯爵家主治医、さらには残忍な権力的革命家であるヨハンナの夫メドシらとのやりとりを緯糸にしたアラベスク模様がこの小説の鳥瞰図と言えようか。しかしアラベスク模様と言えはいかにも聞こえはよい。ここで敢て私見を述べれば、経糸、緯糸綾なすアラベスク、いかにも出来すぎている。つまり偶然の糸が必然の糸にと転化していく過程が陳腐にさえ見えるということである。これは後に述べるが、この小説の結末の弱さともなっている。

さて、そうはいっても、ゲーテのウイルヘルム・マイスターの例を見るまでもなく、その強引とまで言える偶然の連続の裏に必然の糸を張るというのはドイツの小説の一大特徴であり、さして気にかからぬと言えそうである。小説の中心課題はそうした偶然の連続のなかで主人公がどう成長していくかにあるからである。すなわち教養小説という様式である。事実、インマーマンの「エピゴーネン」はウイルヘルム・マイスターに範を仰いだとみてよいだろう。主人公ヘルマンの行動様式はまさしくウイルヘルムそのものである。他に、例えば「小さな炎」にミニョンを、コルネリーにナタリーを見てとることができる。しかし、教養小説ではあり得ない。ドイツ文学史上、慣れに慣れた公説とも言える説をいまさら繰り返すのも気が引けるが、こうしておく。古典主義の静謐、ロマン主義の主観的抽象、共に貫徹することのできた時代が、1830年頃においては過ぎし時代になってしまったという事情がここに介在していると。統一した世界像の喪失である。それゆえヘルマンにはあらゆる偶然を包み

込んでくれる統一した世界のなかで自己発展していく実存を把むなどということとは望むべくもないのである。ヘルマンは水銀時代という特殊な時代状況のなかで、実存との苦闘に身をすりへらしていくのである。時代運命と自己の運命との不幸な重りあいが一層の災厄を呼ぶというところか。その意味で「エピゴーネン」という小説は時代小説、否、時代ドキュメントであったのである。

苦闘と言ったがどんな苦闘なのか、登場人物たちの述懐をみてみよう。美学者ウイルヘルミは、共に時代と闘うことを約し、たった二人だけの秘密結社擬きを結成した同志ヘルマンにこう言っている。「我々は全くの悲惨をこうむっています。一言で言うならばエピゴーネンであり、そして我々は、あらゆる相続者、遅れて生れてきたものにまわりつく重荷を背負っているのです」と。ヘルマンの述懐を見れば、例えばこうである。「僕たちは何と哀れなのだ！僕らは早く熟しすぎてしまった！もう、蕾も花も咲かすことができない！既に雪で頭まで埋められてしまっている」と。苦闘とは、父親たちが遺してくれた富のなかに頭まで埋もれ、ついには自分を発見することができぬ相続者たちの苦闘である。ウイルヘルミはヘルマン侯爵夫妻に向かって、自分達の時代を、「古い数世紀は我々に彼らの上着を遺しました。そして今の世代はその上着にすっぽり身を隠しています。彼らは敬虔な上着、愛国主義者の上着、歴史主義者の上着、芸術家の上着とめまぐるしく、とっかえひっかえしながらこそこそと歩いているのです。それにしてもいったいどれだけの上着があるのでしょうか。」と分析してみせているが、先に言う苦闘とはまさしくこうした時代に生きるもののそれなのである。そして作者インマーマンはこうした苦闘を描いた小説に「エピゴーネン」という題を付しているのである。

ここで少し先走りしてみる。ドイツではエピゴーネンという語がインマーマンの長篇小説「エピゴーネン」をきっかけにして、ギリシア語起源の意味から大きく方向転換したわけだが、それではどう転換したかについて、いま、ここであわてて結論をひきだしてみようというわけである。結論の拠るところは、いままで引いたインマーマンの言葉、小説「エピゴーネン」の登場人物、ヘルマン、ウイルヘルミらの言葉である。さて、その結論とはこうである。すなわち、

エピゴーネンとは、様式多数主義的で折衷主義的で、諸説融合主義的で……黄金時代に続く水銀時代にあらわれる人々であると。これは得やすい結論である。事実、新しい所では、エルンスト・アルカーは自著「ゲーテの死から現在に至るまでのドイツ文学の歴史」（1949年）のなかで、ガイベル、ハイゼらを首魁とするミュン派の詩人たちを論ずる章に「折衷主義者、エピゴーネン、日和見主義者、諸説融合主義者」という小表題をつけ、以上四つの外来語は互いに結びつくものだとしている。エピゴーネンについて先程あわててひきだした結論は現代においてもひとつの説となり得ているというわけである。

ところが、インマーマンの同時代人である、青年ドイツ派のヴィーンバルクの次の言はこの説に、逆順ながら疑問を投げかけている。その言とはこうである。「あるときは豊かな東洋風のガウンを身に着け、あるときはスペイン風のマントを着、あるときは鉄の騎士よろしく鎧・甲冑に身を固め、あるときは現代人としてパリ仕立ての燕尾服をまとい、自分に無縁なはずの民衆や時代のポエジーをまったく本物そっくりに真似する術を心得ている。そういったまこと偉大な詩人たちを詩的カメレオンと名付けてもよいだろう。ところでこうした詩人たちの手になるポエジーは勿論のことますます詩的となり、ある一人の詩人のなかにとり入れられる詩人の数は、年々歳々、ますます増えて行き、一方、当の詩人の生はますます散文的になり、色褪せ、平板になっていくのである」（1833年）。これは様式多数主義、技巧偏重主義への痛烈な批判である。カメレオン詩人とはヴィーンバルクよりいくらか年長の詩人、ブラーテン、リュッケルトらのことをさすものかと思われる。ブラーテン、リュッケルトといえは、ドイツ文学史上、よくエピゴーネンと言われてきた詩人である。さてこれだけではこのヴィーンバルクの言は先の説への反証と読むことができない。読むことができるのは次のように考えたときである。とは言っても考えたのは私ではなく、ゼングレである。そのゼングレによれば、ヴィーンバルクがカメレオン詩人というとき彼は「恐らくゲーテの『ゲッツ』から『西東詩集』に至る道程も考慮に入れていたのである。お手本がひしめいていること——このことは後期ロマン派の世代は全くはっきりと認識している——から、それを『享

受し、鍊成する』というよりは、むしろ嘔吐感が生じ、美的なもの全てに対する次第次第の反感が生まれてきたのである」ということになる。ヴィーンヴァルクの言がゲーテ及びゲーテ時代をも射程に入れているとすれば（むしろこの言を収めるヴィーンバルクの「美学キャンペーン」はまさしく、古典主義、ロマン主義弾劾の講義ノートであった）、それは、エピゴーネンは様式多数主義的で、折衷主義的で、諸説融合主義的で……、黄金時代＝ゲーテ時代に続く水銀時代にあらわれるという説の否定となるだろう。

「ゲーテは……ギリシアの小説以来の伝統的モチーフだけを採り入れたのではなく、はるかにもっと様々なモチーフを採り入れ、その結果、この長篇小説はある意味で18世紀及びそれ以前の長篇小説にある、あらゆる使いふるされ、時代遅れになったしきたりや、いいまわしや、エピソードのアンソロジーとみなされ得るのである。この小説のタイトルですら、1762年のある小説のヴァリアンテに過ぎないのである」とはハロルト・ヤンツの言（1965年）であるが、ここで言う長篇小説とは「ウィルヘルム・マイスターの修業時代」のことである。さらにある評家は、ゲーテの「ファウスⅠ・Ⅱ」こそ、あらゆる時代の、あらゆる様式、説の見事なまでのアンソロジーであるという意味のことを言っている。ゲーテという詩人は多様性詩論の見地に立ち「数千年にわたって拡大されてきた視界が提供できる利点」をふるに利用した詩人ということになる。これは余談だが、木下杢太郎はその東北大学医学部教授時代に、一人の教え子から、北原白秋の詩にあるものには杢太郎の発想によるモチーフが幾つか取り入れられているとあるが、これをどう思うかと尋ねられて、「それは当然あって而るべきことで、白秋は一世の巨人で群少を吸収同化するのは自然のことなのだ」と答えたとのことである。「白秋は一世の巨人」とは疑義あるところで、さらに白秋とゲーテを比較する気もないが、この杢太郎の答は、様式多数主義によることで詩人は最高の業績を成し遂げることができるのだ言っているようにも思える。

ともあれ、ゲーテは様式多数主義、折衷主義、諸説融合主義に則り、最高の業績ウィルヘルムマイスター、ファウストらを生み出した。そういうゲーテをエ

ピゴーネンと呼ぶのだろうか。確か、エピゴーネンとは、黄金時代＝ゲーテ時代に続く水銀時代にあらわれるのではなかろうか？先にあわてて引きだした結論はここでたちまち説得力を失っているのである。

さて、先走りをすることで、とんだ廻り道をしたが、ここで話を再びインマーマンの「エピゴーネン」に戻し、エピゴーネン語史の続きを書くことにする。

いつの時代にでも先祖の遺産はあるものである。お手本はいつの時代にでもひしめいてるものである。小説「エピゴーネン」の主人公ヘルマン、さらにウイルヘルミ、つまりはインマーマンが苦慮したのはこうした事態そのものではないのである。ヴィーンバルクとほぼ同じ調子で語られている先のウイルヘルミの仮装行列を嘆いた語りには実は次のような後段が控えている。「しかし、それはカーニバルの仮装行列に過ぎません。人々は驚くべきことにあの威厳のある衣服の背後に真摯なものをみようともしないのです。それはチロル人やジプシーの仮面の下に実際のチロル人やジプシーがいることを期待しないのと同じことであります。……こうして今の若い人達は24歳には完熟してしまうのです。若い人達にとって一切が、たやすく、口にあっており、彼らは物事の表面の泡をさっと吸い込んでしまうのです」。様式の多様性、形式の仮装行列そのものが問題なのではない。「マイスター」のウイルヘルムは、様々な仮面を次々と取り換えながら自分自身を見いだそうとし、かつ見いだしたではないか。インマーマンの世代は仮面をつけ、それを次々に取り換えることが自らの存在の発見の過程であることを忘れ、茶番にふけている（ゼングレ）、つまりはエピゴーネンなのだというのがインマーマンの認識なのであろう。そしてインマーマンは主人公ヘルマンには自己存在発見の旅に赴かせるのである。結末はこうである。ヘルマンはヨハンナを愛する。そしてヨハンナが父たちの姦通によって生れた異服の妹であることを知り、自分の狂した近親相姦という深い罪（実際は「小さな炎」との交情をヘルマンはそう誤解している）に戦き、遂には錯乱状態に陥る。やがてコルネリへの深い深い愛を確認することでヘルマンはその錯乱状態から立ち直る。立ち直ったヘルマンは、侯爵封建社会と叔父産業社会との系争であった莫大な財産を、あたかもそのどちらにも属していなか

ったからであるかのように受け継ぐことになる。そして、その財産を自分なりの方法で処分するなかでヘルマンは自分を発見しようとするのである。方法とは次のようなヘルマンの言葉に集約されるであろう。すなわちヘルマンはこうなのである。「嵐のような速さで現代は渴き切ったメカニズムへと突き進んでいる。僕たちはその流れを止めることはできない。しかし僕たちが僕たちと僕たちの家族のために緑の小さな広場に垣をめぐらせ、この島を、音をたてて流れてくる工業という巨波の落下に対してできるだけ長く持ちこたえさえすれば、僕たちは不当にののしられることはないだろう」と。実際、ヘルマンは相続した莫大な財産を叔父の会社の従業員に分け与え、会社運営も彼らにまかせ、工場のあった一帯を、いくなれば「千年王国」にしようとするのである。これはファウストⅡ部終末近くの、埋め立て地建設事業と似ていると言えよう。ファウストは悪魔の介入する余地のない夢の国を建設しようとするのであるが、その国とは〈外側では潮が岸壁まで荒れ狂おうとも、／内部のこの地は樂園のような国なのだ。〉（相良守峯訳。以下同）とある。この事業にファウストを駆り立てるのは〈自由な地に自由な民と共に住みたい〉という真摯な願いであり、ファウストはそう願う瞬間に自分の存在を発見し、瞬間に向かって〈留まれ、お前はいかにも美しい〉というあの運命的言辭を吐くのである。この言辭はメフィストレースとの間に交わした契約を破棄するものである。ためにファウストは言辭を吐くと共に倒れてしまう。しかし天使たちは〈聖なる熱火よ、／この火にかこまるるものは／いのちを保ち、／よき人々と共に幸を覚えん。／みな相共に／起ちて祝げ。／空気は浄められぬ、／魂よ、息づけ〉と歌い、ファウストの不死なるものを運びつつ昇天するのである。見事な結末というしかあるまい。勿論、現代の眼から言えば多少の不満は残るかも知れない。夢の国建設のための埋め立て地建設事業は今の言葉で言う強制収用（池田浩士「教養小説の崩壊」）を経て行われたのである。そして強制収用の犠牲となったのはフィレモンとパウキスという老夫婦である。老夫婦を破滅させるというファウストの罪は、グレートフェンに対するそれよりも一層罪惡深重な筈である。にもかかわらずファウストはこの事実に対し、実際に手を下したメフィス

トレースらを激しく呪うだけで、あまつさえ、その責任を〈お前たちが三人で分け持つがいい。〉と言っているのであり、そこにはファウストの「個人的倫理的後悔」(ルカーチ)を見ることはできない。老夫婦の破滅を、自由な土地に自由な民と共に住むという大事の前の小事と決めこんだわけではあるまい。ルカーチの説明によればこうである。すなわちファウストは老夫婦破滅という罪に対して確かに自ら怒りかつ苦悩したのである。だがその怒りと苦悩の矛先は、個人的倫理的後悔を越えて、かく大事と小事を常に矛盾・対立させずにはおかない人間と社会の機構そのものに向けられているのである。

とすると、フィレモンとパウキス悲劇の設定は、作者ゲーテが、大事と小事との矛盾・対立をもっとむきだしに、もっと酷薄に見せずにはおかない工業という巨波が自分の晩年の時代にひたひたと押し寄せてきていることを肌で感じとっていたがゆえのことかも知れない。しかしゲーテはこのことに関して、ファウストのなかでは多くを語らない。これは語らずに済んだということでもある。そしてゲーテはあの埋めたて事業そのものも実は、〈お前さんには土手や突堤を築いたりして／結局はこちとらのために骨折っているのだよ〉というメフィストレースの傍白にあるように、悪魔の仕業とし、ファウストの罪を救い、ファウストに偉大な結末を迎えさせてやるのである。しかも、先の悲劇を設定することによって、大事と小事の真の共存という人間社会にとっての永遠の課題を後世の人々に残しながらである。(池田浩。上掲書参照)

その後世の人々の一人にインマーマンがいるというわけである。ゲーテが、工業という巨波がひたひたと押し寄せてくるのを肌を感じていたとすれば、インマーマンはまさにその巨波に吞まれかかっていると言っているだろう。小説「エビゴーネン」の主人公ヘルマンはその巨波の落下に対し、ささやかな理想郷を設け、それから逃れんとしたのである。これはある意味で悲喜劇に似ている。真摯な茶番である。理想郷建設の裏付けとなる莫大な遺産が、大事と小事との対立・矛盾を繰り返しながら築きあげられてきただろうということについて、また理想郷建設そのもののなかにも必然に見られるだろう、大事と小事との対立・矛盾について作者インマーマンは多くを語ることはしない。これは語

らずに済んだというわけにはいくまい。インマーマンは、小説「エピゴーネン」は、ある精神的過剰を病んだインマーマン自身の世代の全く固有な衰弱を描くのだと言っている。しかし、その固有な衰弱を亢進させているのは先程から言っている矛盾・対立の先鋭化ではなかろうか。陰惨な野戦病院物語に仕立てるのを嫌ってインマーマンは、物語を晴朗にするために、理想郷建設という偉大な結末を与えることにより、主人公ヘルマンを救ってはいるが、私見によれば、ヘルマンにはあらねばならぬ至福の輝きがついぞ見られないのである。

ともあれ、この小説の、というよりは、その「エピゴーネン」という表題は、当時の耳目をひき、エピゴーネンという語のその後の享受・運用に決定的な影響を与えたのである。

エルンスト・フォイヒタースレーベン¹⁾は自著、「精神養生学」(1842年)のなかで、「我々は倦み疲れ、取り澄まし、くずれ落ち、できそこないである。——我々は自分たちをエピゴーネンと名付ける」として、インマーマンの世代論を追認しているとのことである(ギュンター・ハインツ)。

さて、小説「エピゴーネン」を巡る論議で、エピゴーネンという語の新しい意味づけを理解しながらも、インマーマンの言う世代認識を決して追認せず、逆に反感をもったのは青年ドイツ派、及び青年ヘーゲル派であった。そもそもヴィーンバルクの先の言は、自分たちの時代を前代に劣る水銀時代とみなすことへの反発がなせるものと考えてよいだろう。様式多数主義、折衷主義が負たるエピゴーネンの要素であるなら、讃美されるゲーテ時代こそがエピゴーネン時代なのだと述べることによって、後世のエピゴーネン概念についての単純な把握を逆順ながら、図らずも喝破しているのが、先に引いたヴィーンバルクの言なのである。そしてこの言は「様式多数主義を峻拒し、より大きな直接性に向かった1830年代以降の文学」(ゼングレ)の擁護の弁でもあったのである。ヴィーンバルクの僚友 Th. ムントは「インマーマンとエピゴーネンの世紀」のなかで「我々エピゴーネンは一体、我々の父祖たち、英雄たちに全くかなわないのか？」(1837年)と問い、自分たちがエピゴーネンであるとすれば、それはギリシア語起源の意味でのエピゴーネンであるとしている。

1846年～1848年にかけて、ライプツッツにおいて青年ヘーゲル派の雑誌が「エピゴーネン」というタイトルで発行されているが、この雑誌は、オットー・ヴィガント編集の発禁処分を受けた「ハレー年鑑」の「季刊」の続編の由である。さて、その「エピゴーネン」というタイトルについて編者は、これはギリシア語起源の意味で理解してもらいたいと読者に注文をつけているという。

ロベルト・プルッツも自分たちの世代に対する揺ぎない確信からこう発言している。曰く、「エピゴーネンだって。否！我々はむしろプロゴーネンだ。未来の成熟した自由な時代のプロゴーネンだ」（1845年）と。現代の評家、クラウス・ダーヴィットはエピゴーネンと遅れてきた者（Spätling）とを峻別しているが、例えば、ホーフマンスタールは自分を Spätling と感じていたが、今日、彼をエピゴーネンと見るのは誰もいないだろうというわけである。ダーヴィットによれば、Spätling には「noch nicht」という感情が脈打っており、自分を常に未来と関連させてみつめるというところがある。つまり、なるほど自分たち遅れてきた世代を取り巻くものはカタストロフィーに類した空虚さではあるが、その空虚さを経ることによって初めて、真の未来が開かれるのだというのが、Spätling の認識なのだろう。一方、エピゴーネンにはいつも「zu spät」という感情が射影している。つまりエピゴーネンは「我々は遅くすぎた。我々は背後に偉大な人々を控えている。我々は相続者であり、後に続くものである。我々はさしあたっては、これ以上を望むことはできない」と泣きべそを書くだけだというわけである。このダーヴィットの言う「noch nicht」という気持がどうやらプルッツにはあったのだろう。プルッツの先の発言の約40年後にユリウス・ハルトも自分たちの世代をプロゴーネンと語っている由である。因みに、ユリウス・ハルトとは周知のように兄、ハインリッヒと共に「批評闘争」（1882～86）に拠り、自然主義の前衛を担った論客である。彼らの攻撃の目標となったのは、フォンターネ、ケラー、マイヤーらのいわゆる市民的写実主義者たち、それにガイベル、ハイゼらのいわゆる擬古典主義者たちであった。もっともフォンターネらへの批判は、彼らの文学のもつ郷土性、地方性に集中し、一種愛国主義的批判であり、認めるところは認めているのである。ところ

が、自らをもってプロゴーネンと任じていたハルト兄弟らがガイベルらを古典主義のエピゴーネンであると批判しているのは、当時のエピゴーネンという語の享受・運用からみれば容赦のないものだったと言えるだろう。（A. ホルツの場合、ことガイベルに関してはこうは言えないかも知れない。）ところでハインツ・リントシュカという評家によれば、この批判の容赦なさは、ガイベルらの金銭的成功と大衆受けに対する嫉妬もだいぶ強く働いているという。事実ガイベルの処女作「詩集」は1840年に刊行され、1870年を過ぎてからにわかにベストセラーになり、1877年には第83版、1884年には第100版、詩人死しても尚、1902年には第129版を重ねるというまさしく破天荒な売れ行を示したという。ハルト兄弟らは、こういう、1870年代から1880年代にかけての泡沫会社時代のベストセラー作家たちをエピゴーネンであると排撃しているのである。

さて、話を再び、エピゴーネン語史に戻してみると先ずは次のような疑問が湧いてくる。つまり、インマーマンによって新たに刻印されたエピゴーネン概念が、青年ドイツ派、青年ヘーゲル派による一勢の反発・異議にもかかわらず、当の青年ドイツ派たちによってかえって広く伝播していったのはなぜなのかという疑問である。ここであえて臆測を呈しうして私なりにその疑問に答えてみたい。青年ドイツ派、青年ヘーゲル派はエピゴーネンという語を本来のギリシア語起源に与え返し、その意味であるならば、確かに自分たちはエピゴーネンであるとした。それではなにに対するエピゴーネンなのか。挫折したフランス革命に対してのエピゴーネンである。挫折したフランス革命の理念を我がドイツで受け継ぎ補完し、かつその理念の全き現実化を図るというわけである。先の青年ヘーゲル派の雑誌「エピゴーネン」のなかである論説は「革命のエピゴーネンたちの攻撃の前に、先達者たちがその直前で挫折した聖なる都市の城壁はくずれ落ちるに違いない」と宣言している。しかし、ベンノ・フォン・ヴィーゼ、ゼングレらの言をまつまでもなく、青年ドイツ派、青年ヘーゲル派にとって革命とはあくまでも教養のなかにあり、抽象的理念のなかにあるだけであった。彼らは、自我が自らのうちにつかみうるという確信と、現実の社会とのとてつもない乖離に苦悩し、自分たちの理念の抽象性に一層の磨を

け、果てしない革命談義を繰返していったのである。彼らが拒否しようとした多様性とはつまり自分たちが立脚する地点の多様性である。しかし、この多様性は実は、ひとつの統一した世代を秩序だてていた古典主義、ロマン主義時代よりもはるかに彼らの世代に侵食していたのである。この多様性が中心の喪失となって彼らの世代の現実にはねかえってきているというところだろう。こうした現実を前にして、無秩序を再構成する筈であった理念は何ら役に立たず、勢いその理念は先に言ったように惨めな空回りを続け、彼ら自身がギリシア語本来のエピゴーネンからインマーマンの言うエピゴーネンへと堕ちていくのである。こうしたパラドックスを彼ら自身が体現してみせることによってエピゴーネンという語は彼らの意図とは逆に急速に享受・運用されていったのではなかろうか。

さて、青年ドイツ派、青年ヘーゲル派の意図によってではなく、彼らの存在様態によって急速に発展していったエピゴーネン概念は19世紀中葉も過ぎるとオリジナル絶対論者、かつ進歩主義者と結びつき、彼らの恰好な飛び道具となったのである。詩人某はエピゴーネンなり、黙殺。といった具合である。勿論こうした風潮に対する反発がなかったわけではない。この小文が多くを負っているM. ヴィントフルは、J. リッター編の「哲学歴史辞典」のなかで、エピゴーネンの項を担当し、その際、次のようなB. アウエルバッハの言を紹介している。ベルトルト・アウエルバッハとは今ではほとんど忘れられている作家だが、19世紀中葉にはいわゆる農村小説により一時期人気を博したとのことである（フリッツ・マルティーニ「ドイツ文学史」）。さてその言とはこうである。「あらゆる言葉のなかでもっともばかげたものはエピゴーネンに関するそれである。人間はすべてエピゴーネンなのであり、歴史のどの時期をとってみても、たとえそれが輝きに満ち満ちていたとしても、ひとつとして、空前絶後の力がみなぎっていたときはないのである」。この言は古典主義、ロマン主義の文化的遺産をいかがわしいものとみなす当時の風潮に対して、それらの遺産を保守せんとする立場からエピゴーネンという言葉を持ちだしてきたように思われる。いずれにせよエピゴーネンという語を相手を殺傷する飛道具にしてはいない。

またニーチェは詩人とは「本来、常にかつ必然的エピゴーネンである」と言っている。これはニーチェの芸術表現というものを表現形成と魂の意識化の関係から捉えようとする考え方からの発言であり、次のような言とつながっていると考えてよいだろう。「自分のことを伝えたい、お互いに根源的にかつ細部に至るまで理解しあいたいという欲求・希求が長い間人類を支配してきた。そしてその結果、ついには伝達力と伝達技術が過剰になるという事態がおこってきた。その過剰は、あたかも長年に亘って蓄積されてきた、今やそれを惜しげもなく浪費してはばからないような相続者を待ち受けている財産のようなものである。いわゆる芸術家がこの相続者に当る。同様に説教師、予言者、文筆家、常に長い連鎖の後にやってくる全ての人間がこれに当る。〈遅れて生れてきたもの〉はいつの場合でも、その言葉をもっともよく理解するならば本質的に浪費者なのである」。要するに、芸術家とは必然的に相続者であり、エピゴーネンである。それなのに今さら、誰彼はエピゴーネンだと指弾して得意がるのは、芸術表現の本質を知らぬものの奇なる沙汰であり、どうやらこのエピゴーネンという新案の概念は不安定で新奇なものに出会うとかえってあたふたとする極楽トンボの強力な護符として作用するらしいというのであろう。

それかあらぬか、ひたすら、ただひとえに作品のなかにそれに先行する作品の影響関係を見いだそうとする一部、偏頗な実証主義たちにとってエピゴーネン概念は困ったときの神だのみならぬ、評釈の決め手となる言葉であつたらしい。

さて、こうしたニーチェらの異議申し立てにもかかわらずエピゴーネンという語はひとつの評語として、否、蔑称語として広く浸透していくのである。浸透していったのは勿論、この語がなにもゲーテ時代直後の詩人たちだけを対象としなくなったことと揆を一にしている。黄金時代に続く水銀時代をエピゴーネン時代と呼ぶならば、ドイツ文学史のなかで、ひときわ高い山脈を形成したのはなにもゲーテ時代だけに限らず、その前後にも一つや二つ高い山脈が聳えているのだから、エピゴーネン時代が他に一つや二つあっても別に不思議はないだろう。

この小文が多くを負っているM. ヴィントフルの論説は、「語史」に続く「現象」という章でエピゴーネンの発現形態を、個人エピゴーネン、若年期エピゴーネン、時代エピゴーネンの3つに分類している。個人エピゴーネンとは時代に関係なく、いつの時代にもあらわれる個々のエピゴーネンのことをいう。若年期エピゴーネンとは詩をかく、それも年の割には少しませたところのある少年小女のことである。若年期においてはまさしくエピゴーネンであるが、長じるにしたがって自らのオリジナルを獲得していったというある種の詩人たちの修業時代の姿である。これに関してはヘルマン・ヘッセの「過去との出会」（1953年）という自らの苦い思い出でを材にして見事一つの真理を衝いた、めでたい短文がある。著名な詩人の例に洩れず、ヘッセにも明日の詩人を夢みる多くの少年少女より、是非、添削をと多数の自作原稿が送り付けられてくる。ヘッセはそれらに目を通すと十中八、九がっかりする。どれもこれも著名な詩人の真似ばかりなのである。あるとき、ヘッセはふとしたことから自分の少年期に書いた詩の生原稿を目にする。なんとその詩はアイヒュンドルの模倣に過ぎなかったのである。ヘッセは愕然とし、やがて悟るのである。人はだれでも最初はエピゴーネンではなかろうか。そしてそのうち幾人かがやがてエピゴーネンを脱し真の詩人となるのではないかと。直接、エピゴーネンという言葉は使われてはいないが、この短文は先のようにまとめることができるヘッセの模倣論とみてよいだろう。これは余談だが、ヘッセはこの短文の終りに、自作「車輪の下」が近ごろ日本語に訳された旨を記し、その日本の読者から美しい感動的な手紙を貰ったと書き、その手紙を一部手直しをして紹介している。それによるとこの読者は東京の一高校生とある。果たして誰なのだろうか。ヘッセはこの高校生のドイツ語はかなりよくできていると賞めている。近頃、日本で訳された「車輪の下」を読んでの手紙とあるから、手紙の日付けは、この短文発表年1953年とそうは遠くない年月日になるのだろう。だとすると東京の一高校生とは旧制高校ではなく新制高校の生徒となるだろう。果たしてこの高校生とは誰なのだろう。いたく興、唆られるところである。

さて余談ついでに言うと、ローベルト・ムシルも上のヘッセとほぼ同じよう

な主旨のエッセイを1931年に発表している。こちらは「文士と文学」と題されており、文士という語を蔑称語として享受・運用することへの異議申したてである。単に教養のある作家という意しか持っていなかったのが、エピゴーネンと同じようにやはり青年ドイツ派内の文学論争をきっかけに「自分の人生を規定するような倫理的イデーの実現化にいくらかでも役立てよう」と書くのではなく、書くために書くという全くの売文家（「ドイツ外来語辞典」で、独創的才能をいっさい持ちあわせない擬似詩人といった意味に変化していったのが文士という言葉である。ムシルはその意味を変化させていった文学論に異を唱え、「我々は最初は何にはともあれ文士なのである」と言っている。このエッセイは、先のヘッセのそれと同じく、このエピゴーネン語史の後続のしかるべき章で詳しく触れることにする。

さて時代エピゴーネン。黄金時代に続く水銀時代に生きるエピゴーネンのことである。先に言ったように長い歴史のなかでは、黄金時代はなにも一回限りというわけではない。ゲーテ時代の他に黄金時代と言えるのは一つや二つある。その一つにあげられるのは12世紀に栄えた宮廷文学時代である。ドイツ文学史界にエピゴーネン概念を導入した「文学史の教父」ウィルヘルム・シェレルは、その大著「ドイツ文学史」（1899年）のなかで、1190年から1220年の間に陸続とあらわれた、ハルトマンの「エーレック」、「グレゴリウス」、「哀れなハインリッヒ」、「パルチヴァール」の初めの部分、ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」、ヴォルフラムの「パルチヴァール」の結尾、それに「ヴィルハルム」といった宮廷叙事詩の傑作をたたえているが、これら巨人たちの後に続く詩人たちを述べる段になるとエピゴーネンという章を設けている。記述の大半はヴォルフラムとゴットフリートの後継者について割いてある。この二人が多くのエピゴーネンを従えたのは、前者が「トリスタン」を、後者が「ヴィルハルム」をそれぞれ未刊のまま残し、エピゴーネンたちに仕事を与えたからであるという。さらにシェレルの記述は、ゴットフリートエピゴーネンであるルドルフ・フォン・エムスとコンラット・ヴェルツヴルクについて及んである。ゼングレは、ルドルフ・フォン・エムスをゴットフリートのエピゴーネンとみ

るシェレルの意見に批判的であるが、これらの詩人たちの業績を一篇たりとも目にしてはいない私にはなんとも言えない。そこで、ゲーテ後の時代以外に対してもエピゴーネン時代という言葉が使われているということを上記紹介するにとどめておく。

他に同じような例を捜すとカール・フィエトール著の「ドイツ頌歌の歴史」(1961年)がある。このなかでフィエトールはドイツ頌歌黄金時代を築いたクロップシュトック、それに少しく遅れてヘルダーリンらの後に続く頌歌詩人たちを、エピゴーネンという章のなかで論じている。(もっともヘルダーソンの場合、当時、彼を知る詩人はほとんどいなかったのであるから、ヘルダーリンエピゴーネンは存在しなかったことになる。) さてその後続く頌歌詩人とはプラーテン少し遅れてハインリッヒ・ロイトホルトらのことを言う。ゲーテは素通りである。ゲーテは一篇の頌歌も書いていないのだから当り前の話である。さらにシュレーゲル兄弟もこの頌歌にはなんの興味も示していない。ところでプラーテンは頌歌詩人としてはなぜエピゴーネンなのか。フィエトールによると「プラーテンは頌歌というジャンルを頌歌にあった体験や素材のための形式として探しだしたからではなく、歌心(Liedpoesie)が消えゆく時代に形式の名人としての栄冠を得ようとしたから頌歌を書いたのである」がゆえにエピゴーネンなのである。この後、フィエトールは、これらエピゴーネンたちの他には二度と採り上げられることがなくなった頌歌の終焉を叙述し、「この眠れるジャンルを活性させるのに、その巨匠たちの誰か一人のもっとも微妙な色調をうまくまねしたところで、それはなんの活性手段にもなりはしないのである。ただ、自由と法則を一致させながら、このジャンルの客観的形式のなかに全く独自の新しい息吹きを吹きこむことができるものだけが、このジャンルを生きかえらせ、新しい未聞の頂点に導くことができるのである」という言で「エピゴーネン」の章を閉じている。ともあれ、フィエトールはゲーテ時代と直接からめることなくエピゴーネンという言葉を使用しているのである。

しかし、どの時代をエピゴーネン時代と呼ぶにしても、そう呼ぶ側には黄金時代の次には水銀時代が続くという認識が宿っていることは確かであろう。そ

して黄金時代→水銀時代という図式が確立し、それが水銀時代と言われる時代についての評価の決め手となり、徒に自己増殖していくと「その時代全体を、またエピゴーネンと呼ばれる個々人の個性をつぶさにみること」（ギュンター・ハインツ）がなくなるというまこと不幸な結果を惹き起こすのである。例えばグリルパルツアーは古典主義・ロマン主義のエピゴーネンだとされ、長い間不当に低く評価されていたのである。

ところで、ゼングレはその大著「ビーダーマイヤー時代Ⅰ」（1971年）の「エピゴーネン問題のために」という一節のなかで次のようなジャン・パウルの興味ある一文を引いている。この一文は、黄金時代→水銀時代、エピゴーネン時代という図式化が確立するずっと以前の1819年に、ヤコブ・グリムの文化敗北主義を攻撃したものである（序でに言う、グリムの辞書にはエピゴーネンという項は見当たらない）。曰く「一体なにゆえ、常にフレッシュで、朽ちることなく、自然の春のようにものみなうみだしているドイツのような民族が、たかが二、三の天才たちが半世紀にわたって創造活動をしてきたからといって、創造力を疲解させ、停滞させてしまうだろうか」と。ジャン・パウルが後世の、黄金時代→水銀時代、エピゴーネン時代という図式の確立を目にしたならば、文学は、否、人間は連作のきかない畑とは訳がちがうのだと噛みついてたことだろう。因みに19世紀末の評家、カール・シュピッテラーは、エピゴーネン問題を論じるとき、天才時代の後には二流の詩人しか生れぬという捉え方に、まさしく文学は畑とは違うのだと皮肉を飛ばしている。

以上のようにエピゴーネンという語の享受・運用は推移してきたのだが、20世紀半ば近くになると、この享受・運用に対する異議と、エピゴーネン現象についての真剣な考察があちらこちらでなされてくるようになってくるのである。これは従来の享受・運用のもたらす弊害（エピゴーネンという言葉で、そういわれた時代、個々人を丹念に見ていくことを怠るという弊害）を座視でなくなったからであろう。またエピゴーネン現象を新たに捉え直そうとするこうした機運には、伝統と根源という古来永遠の問題についての従来とは異った新しい論議が活発になってきたことおおいに力与っているといえるだろう。

さて上のようなエピゴーネン現象についての新しい論議のいくつかを紹介するとすれば次のようなものがある。先ず一番古いところでは、先に少し触れたシュピッテラーの「エピゴーネン気質。脳、神経そして脊髄に及ぼすこの気質の危険。診断と治療」という講演。（これは1890年に行われた講演である）。次にこの小文の負うところ大である1951年発表のM. ヴィントフルの「エピゴーネン。その概念、現象と意識」。1961年発表のハインリッヒ・ヘネルの「エピゴーネン抒情詩」。この論は、従来、エピゴーネンと指弾され、余り振り返られることのなかったプラーテン、リュッケルトらの詩業を肌理細かくみようとする論述である。1965年アムステルダムで行われた第3回国際ドイツ文学会の報告誌「伝統と根源性」。この誌にはC. ダーヴィット、H. ヤンツ、W. コールシュミット、H. マイヤー（注、ハンス・マイヤーでなく、ヘルマン・マイヤー）、E. シュタイガーらの報告文が載っており、エピゴーネン現象についての活発な論議がこの学会で行われたことを示している。1971年にはF. ゼングレの大著「ピーターマイヤー時代I, II, III」のうちIが出版されている。これは復古時代文学の研究を通して、従来のエピゴーネン概念の修正を求めている。1969年発表のM. ドゥルツァクによる「エピゴーネン抒情詩、ゲオルゲクライスの文学」。1973年発行、G. マハル編によるアンソロジー「泡沫会社時代の抒情詩」の序論。1974年発行、G. ハイנטツ編によるアンソロジー「ドイツ労働者文学1910～1933」の緒言等々である。

さて、ここで一先ずエピゴーネン語史を終えることにし、次章では先に挙げた数々のエピゴーネン現象についての活発な論議を紹介しながらエピゴーネン概念について考えていくことにする。

引用及び参考文献

池田浩士著「教養小説の崩壊」現代書館

木下杢太郎著「木下杢太郎全集」月報5 岩波書店

相良守峯訳「ファウスト第二部」岩波書店

本郷義武、飛鷹節他訳「ゴットフリート・ベン作品集」第2巻 社会思想社

Ernst Alker : Die deutsche Literatur im 19. Jahrhundert. 1981, Kröner.

- 但し、1949年の第一版は下記の標題で刊行された
 「Geschichte der deutschen Literatur von Goethes Tod bis zur
 Gegenwart.」
- Herbert Cysarz : Epigonendichtung. In : Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. 1958.
- Claude David : Über den Begriff des Epigonischen. In : Tradition und Ursprünglichkeit. S. 66-78.
- Manfred Durzak : Epigonenlyrik. Zur Dichtung des George-Kreises. In : Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft. 13, 1969, S. 482-529.
- J. W. Goethe : Weimarer Ausgabe.
- Hugo von Hofmannsthal : Gesammelte Werke in Einzelausgabe 15 Bde.
- Friedrich Gundolf : George. BEI GEORG BONDI IN BERLIN.
- Günter Heinz : Epigonendichtung. In : Handlexikon Zur Literaturwissenschaft. Fischer S. 111-116.
- Heinrich Henel : Epigonenlyrik. Rückert und Platen. In : Euphorion 55, S. 260-278.
- Günter Heinz : (Hg.) Deutsche Arbeiterdichtung 1910-1933. Reclam.
- Hermann Hesse : Begegnung mit Vergangenen (1953) Ges. Schrift Bd. 7, S. 869-876.
- Harold Jantz : Kontrafaktur, Montage, Parodie : Tradition und symbolische Erweiterung. In : Tradition und Ursprünglichkeit. S. 53-65.
- Karl Immermann : Die Epigonen. In : Werke in 5 Bde. Athenäum Verlag.
- Werner Kohlschmidt : Die Problematik der Spätzeitlichkeit. In : Spätzeiten und Spätzeitlichkeit. S. 16-26.
- Heintz Linduschka : Die Auffassung vom Dichterberuf im Deutschen Naturalismus. 1978, Peter Lang.
- Günther Mahal : (Hg.) Lyrik der Gründerzeit. Max Niemeyer.
- Robert Musil : Literat und Literatur. In : Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden, hrsg. v. A. Frise. Hamburg.
- Friedrich Nietzsche : Unzeitgemässe Betrachtungen. Die fröhliche Wissenschaft. In : Werke in drei Bänden. 1966, Hanser.
- Wilhelm Scherer : Geschichte der deutschen Literatur. Askanischer Verlag.
- Friedrich Sengle : Restaurationsliteratur. In : Begriffsbestimmung des literarischen Biedermeier. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Biedermeierzeit. Bd. 1, 1971, J. B. Metzler.
- Emil Staiger : Dialektik der Begriffe Nachahmung und Originalität. In : Tradition und Ursprünglichkeit. S. 29-38.

Carl Spitteler : Das Epigonentum, seine Gefahren für Gehirn, Nieren und Rückenmark, seine Diagnose und Heilung. In : Werke. Bd. 7.

Werner von Stegmann : Die Epigonen. Familienmemoiren in neun Büchern.
In : Kindlers Literatur Lexikon im dtv in 25 Bänden.

Karl Viétor : Geschichte der deutschen Ode. 1961.

Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Benno² von Wiese : Zeitkrisis und Biedermeier in Laubes ›Das junge Europa‹ und Immermanns ›Epigonen.‹ In : Begriffsbestimmung des literarischen Biedermeier. 1974.

Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Manfred Windfuhr : Der Epigone. Begriff, Phänomen und Bewußtsein. In : Archiv für Begriffsgeschichte 4. (1959) S. 182-209.

: Epigone. In : Historisches Wörterbuch der Philosophie.